

人生三つの坂がある。上り坂、下り坂、まさかの坂。その三つ目の坂、まさかの坂に私53歳のときに出会ってしまいました。胃の調子が悪くかかりつけ医に診察に行った時です。触診で下腹部を押さえられた時「あいたた～」と叫ぶと、エコーで「これ変だよ、卵巣に何か変なものがある」と指摘され、すぐさま病院の選択を迫られました。「胃薬貰いに来ただけなのに」ととても困惑し、動揺のまま帰宅したのです。主人に告げた時、冷静に受け止めてくれました。そのお陰で私は気持ちを落ち着かせることができました。しかし、周りには、自分の仕事の処理等気掛かりな事が沢山ありました。この際丸投げで主人を頼ることにしました。入院するときには、今は亡き病弱な母が付き添ってくれました。母に申し訳ない気持ちで心の中で手を合わせておりました。

その後、手術、化学療法へと続く長い入院生活がはじまりました。手術ではとても大変な思いをいたしました。術後すぐに腹内を抗がん剤での洗浄の後、化学療法、まずはタキソール3クールから。ここからは自分自身との壮絶な闘いの始まりでした。何が何でも最短時間で退院しようと目標を自分で定め、1クール21日！その為には、抗がん剤に加えて自己免疫力を高めてがん細胞と闘う決意をしました。その後、点滴と闘いました。点滴中「どうか悪い細胞を消滅させて、良い細胞は残して」と強く念じながら、水をガブガブ浴びるように飲み「毒よ流れてくれ」と念じながら。でも残念だったのですが2クール目には、枕に髪が付きはじめ、脱毛がはじまりました。無念な思いと怖いので、背筋の凍る感覚は今でも拭い去ることはできません。それから脱毛頭のケアの為にバンダナや帽子を色々にアレンジしながら、病室の方々と結構楽しませていただきました。4人部屋だったのですが、それぞれの苦しみを抱えながらも、笑いが絶えない病室になるように心がけていました。

笑顔は自分自身を楽にさせてくれます。また周囲の人達にも安堵感を与えます。退院時看護師長さんからも「部屋の雰囲気明るくして下さいありがとうございます」と感謝のお言葉頂戴いたしました。病気をすると、どうしても色々な事を考えてしまい暗い表情になりがちです。でも笑っていると何か良いこと有るのでは、なんて思ってしまう。笑顔は心の波動です。それに免疫力も倍増され、がん細胞を吹っ飛ばすかも分かりません。とりあえず私は「水」と「笑顔」で目標達成し、自己目標の3ヶ月未満で退院いたしました。術後10年現在のところ再発はないようです。孫子の兵法に「敵を知り己を知れば百戦危うからず」と云う言葉があります。敵の事を知り、味方のことを知って臨めば百回戦っても負けることはありません。と言う意味なのですが・・・

がんについても同じことが言えるのではないのでしょうか。信頼できる医師と納得できる治療、それに笑顔をプラスしながら。